ご自由にお持ち帰りください

感じる旅、考える旅。

トランヴェール

Train Vert

5

2017 May

［特集］

「TRAIN SUITE 四季島」走る

［エッセイ］

沢木耕太郎

『旅のつばくろ』

角田光代

『復興の町を行く』

An abridged version of *Train Vert* is available in English.
提供《Train Vert》中文(简体)的简易版。
《Train Vert》的簡易版可以中文(繁體)瀏覽。
"Train Vert"간이판을 한국어로 보실 수 있습니다.

Train Vert

未来のキップを、すべてのひとに。
TICKET TO TOMORROW
JR東日本

日本の伝統工芸と旅をする悦楽

「トランスイート四季島」は、伝統工芸の走るミュージアム。これは、「四季島」の内外装をデザインするKEN OKUYAMA DESIGN 奥山清行氏の言葉だ。古くから優れたものづくりの文化を誇ってきた日本。「四季島」では東日本を中心に、地域が誇る工芸や製品をインテリアや什器に生かしている。「四季島」の心地よい空間を彩る、豊かな美意識と卓越した技術に裏打ちされた品々。その造形や意匠に秘められた職人の技やものづくりの心、そしてそれらを支えてきた人々のストーリーを、ほんの一部だがここに紹介しよう。

文／西上原三千代　撮影／岡倉禎志・片山貴博

穏やかな樹木を思わせる壁面が印象的なラウンジ。秋田木工のソファと椅子がくつろぎを演出する

右上から時計回りに：「四季島スイート」では秋田木工の座椅子が使用されている／天童木工のコートハンガー／客室に施された意匠／秋田木工の椅子、テーブルが心地よさを演出しているダイニング／ブナコのシェードが印象的なランプ／和モダンな雰囲気で統一された客室

100年を超す曲木の伝統

堅いはずの木材が、まるで飴のように見る間に曲がっていく。簡単そうに見えるが、職人の額には玉の汗が浮かぶ。

「力も必要ですがコツがあって、木によって微妙に力加減や方向を変えるなど、経験と勘がものをいいます」

そう解説するのは秋田県湯沢市郊外にある秋田木工代表取締役、瀬戸伸正さん。明治43年に始まる秋田木工は、曲木（まげき）家具専業のメーカーとしては日本で唯一の存在だ。曲木の技術は19世紀半ばに、ドイツのミヒャエル・トーネットによって確立された。日本へは、殖産興業のためのヨーロッパ視察によってもたらされたと瀬戸さんは言う。

「素材のブナは日本にたくさんありました。技術と機械があれば日本でも量産が可能でした」

水分が多く使い道のなかったブナが、生かされる技が伝わったのだ。このときは東京や大阪などでも

曲げた後の研磨も重要な仕事だ。角をなくして人の身体にやさしくフィットしやすい曲面に削り出していく。手で触りながらチェックする目も厳しい

Product-1

曲木

秋田木工（株）

Product-3

BUNACO

ブナコ(株)

"エコ"な手作り木工品

ブナコという名は、身近なものに「コ」をつけて呼ぶ津軽方言に倣い、またブナのコイルという意味合いからつけられた。ブナを厚さ1ミリほどにかつら剝きにした薄板を6～12ミリ幅のテープにカットし、コイル状に巻いて立体的な形を作り出す。

「ブナは水分が多く、狂いやすいため建築には使えません。1950年代、青森にたくさんあるブナを何とか有効活用できないかと考案されたのが、この技法でした」

テーブルに打ち付けた釘に押し付けるようにしてきっちり巻いていく

広報担当の秋田谷恵さんは言う。県の工業試験場で生み出され、昭和38年から製造している。長らくテーブルウエアが主体だったが、平成14年以降照明も手掛け、天然木のランプとして人気を博しているという。

工程は完全な手作業だ。まず基板に緩みなくテープを巻いて盤状にする。これを丹念に道具で押し出して少しずつ形を整えていく。

「製法上の限度はありますが、かなり自由自在な造形が可能です。さらにエコロジカルなこともブナコの特徴ですね」

たとえば椀やボウルを轆轤(ろくろ)で挽いて作れば原料の8～9割もの削り落としが出る。しかしブナコの場合は無駄がほとんどなく、ほぼすべてを生かすことができるのだ。

「四季島」ではブナコは客室のトレイやダストボックス、さらにラウンジのランプとしてお目見得する。照らす光が柔らかに感じられるのは、天然木ゆえだろうか。ブナの薄板を光が透過する際に生まれるという赤い色みがシェードの縁をやさしく彩り、旅する者の心をなごませてくれる。

押すのには湯呑みを使う。いろいろ試したが、一番案配がいいという

成形合板技術が生む造形の妙

モダンデザイン史に燦然と輝く、柳宗理デザインのバタフライスツールはご存じの方も多いだろう。この椅子を生み出した天童木工は、成形合板による日本の家具製造のパイオニアだ。1～1・5ミリの薄い木材に接着剤をつけ、幾層にも重ねて型に入れてプレスし、加熱する。

「何よりの特徴は、デザインの自由度が高いことにあります」と企画部長の福島幸雄さん。自由な曲面を作ることができ、強度に優れて細く薄い構造が可能で、軽く丈夫だ。だからこそバタフライスツールの造形も可能だった。この特徴を生かし、天童木工は他にもデザイナーとコラボレートした名品の数々を生み出してきた。「四季島」のラウンジに置かれている奥山氏デザインのコートハンガーもその一つ。

思い思いの方向へ9本の枝が伸びる、森の樹々を思わせる造形。

「ラウンジの良いアクセントになっているようです」

シンプルな形で成形は難しくないが、9本のパーツを一分の隙なく組むには、微妙な歪みも見逃さない匠の技術が必要だ。ちなみに1枚の合板をプレスして造る、同じ奥山氏によるオリヅルというチェアが、上野駅の「四季島」専用ラウンジで使われているが、技術的に非常に難しく200以上の試作を繰り返したという。

「どんな難しい注文もお断りしないことを原則にしています」

戦後に成形合板の技術と出合い、家具製造の枠にとらわれない発想とチャレンジ精神で大きく羽ばたいてきた天童木工。その精神と技術は、製品の一つ一つに脈々と息づいている。

Product-4

成形合板

(株)天童木工

上／接着剤をつけて重ねた薄板を、それぞれの専用の型に入れてプレスする。加熱することで接着剤が硬化して自在な形が作られる

右／成形合板技術だけでなく、さらに家具へと加工する優れた技術も天童木工製品の品質の高さを支えている。カットした部材は丹念に研磨を繰り返して、仕上がりの精度を高めていく

イタリア語で樹木を意味する「アルベロ」と名付けられた、奥山氏デザインのコートハンガー

やまのべ 多田耕太郎の

さくらんぼ

私は2003年6月はじめて山形県山辺町を訪れた。多田さんのサクランボに出会うまで国産のサクランボにある種の「抵抗」を感じていた。フランスなどでは、季節になるとサクランボは市場にずらっと山積みになる最もポピュラーで安い果物なのに日本では高級品だったからだ。

ところが多田さんの園地で摘み採ったサクランボを口に入れた瞬間、印象が変わった。その味、多田さんのサクランボは自然を相手に周到に準備されたまぎれもない「作品」だったからだ。

以来、私は多田さんのサクランボの魅力に抵抗できない。

映画評論家・仏文学者
元東京大学総長
蓮實 重彦 先生

日本が世界に誇れる果物の産地「山形」と言えばさくらんぼ「さくらんぼ」と言えば多田農園そうなりたい、言われるようにしたいとより美しく、よりおいしくなるようにいつも考えて育てています。山形の、そして私ども自慢の甘く赤く輝く、デリケートな宝石本当のさくらんぼのおいしさをぜひ多くの方々に味わっていただきたいと思います。

特選〈紅姫〉
約700g・桐箱詰め

紅姫―べにひめ―は、多田農園の登録商標です。

やまのべ多田耕太郎のさくらんぼ
多田農園
〒990-0321 山形県東村山郡山辺町元宮63-2
TEL:023-664-8302 FAX:023-664-8336
山形多田農園 検索